

第四回 曹洞宗 妙義寺

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

江戸時代の寛文二（一六六二）年に、当時の妙義寺住職盤撮は長門国深川（山口県長門市）の大寧寺に對してその由緒を報告しています。

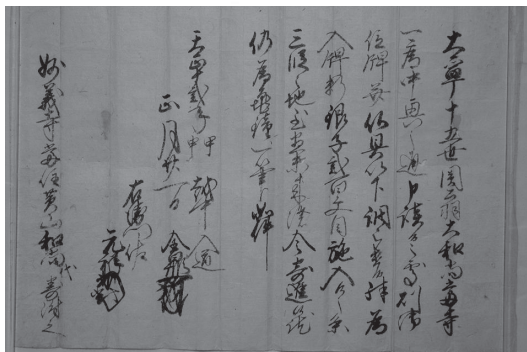
それによると妙義寺は、秀兼（益田兼家のこと）が木叟和尚を開山（初代住職）に招き建立したと記されています。益田兼家は十五世紀前半頃の益田氏当主ですので、妙義寺はその頃に創建されたと考えられます。応永三十（一四二三）年に兼家が寄進した寺領の注文（目録）の写と思われるものが「妙義寺文書」に残っています。

その後も、文安三（一四四六）年に益田氏家臣の下兼成が寺領を寄進したり、永正元（一五〇四）年には益田宗兼が境内にあった武門守護の神である軍八頭惣社大明神の祭礼を怠らないよう伝えたりするなど、妙義寺は益田における重要な宗教的中核の一つとして信仰を集めていました。

しかし、妙義寺が大きく興隆したのは戦国時代の益田藤兼の頃と考えられます。藤兼は、大義女・昌月女・崇寿女（妻や一族の女性の法名と思われる）の菩提（冥福）を弔うために、度々寺領を寄進しました。

さらに天正九（一五八一）年には、大寧寺の住職関翁殊門と、妙義寺の住職殊梅、子の元祥との四人連名で妙義寺の法度（規則）を制定しました。この時、妙義寺には、波田・澄川・都茂・丸茂などに十五の末寺があると記されています。関翁殊門は天正十二年に妙義寺の中興の開山として招かれます。

大内義隆が自害したことでも有名な大寧寺は、中国地方における曹洞宗の中心的な寺院でした。妙義寺と大寧寺に強い結びつきを作ることと、藤兼は妙義寺の興隆を願ったのでした。



「妙義寺文書」より全鼎（益田藤兼）・益田元祥連署寄進状。妙義寺の中興の開山として、関翁殊門を招き、銀子と寺領を寄進すると記しています。